



貝原守一医学振興財団

会報

第5号

平成9年4月



foundation juridial person MEDICAL SCIENCE KAIBARA MORIKAZU PROMOTION FOUNDATION

目 次

- ・ごあいさつ
理事長 佐伯 清美 P 1
- ・第 5 回研究助成金贈呈式について
専務理事 佐伯 仁子 P 2
- ・貝原財団平成 8 年度研究助成選考過程について
選考委員 橋場 邦武 P 4
- ・平成 8 年度研究助成金贈呈者一覧表 P 7
- ・授 賞 論 文 P 8
市来 俊弘、坂本 泰二、甲斐 久、
樋田 一徳、君付 隆、神田 芳郎
- ・平成 8 年度 青藍会 貝原守一賞 授賞者 P 14
- ・平成 8 年度 宮崎一郎奨励賞 授賞者 P 15
- ・財団の主な事業報告 P 16
- ・貝原守一の遺稿より（その 5, 6） P 17



平成8年11月30日 (KKRはかた)

第5回 貝原財団研究助成金贈呈式

ご あ い さ つ

理事長 佐伯 清美

平成3年3月、当財団が認可を受けて発足し6年になりますが、今日まで支障無く運営され、事業を続けて来れた事は、一重に財団役員の心からの御協力と、関係各位の温かいご支援ご指導のお陰であり、ここに篤く御礼を申し上げます。

財団発足当時の豊かでありました財源は、相次ぐ国の低金利政策のため次第に圧縮減額され、設立時の事業計画案も十分には実現出来ない状態です。当分国の低金利政策はつづけられるものと思いますが、幸い担当理事の尽力のお陰でどうにか必要経費の確保は出来ており、感謝申し上げます。次第です。

さて、財団の最重要な事業であります若い研究者への研究助成金贈呈も、昨年で5回を数えました。毎年各大学や医療機関よりの論文の応募は20数編と一定した数であり、一応財団の研究助成の事業が各大学に十分認識されたものと思っております。現在までの研究助成金贈呈者は39名になりました。うち数名の論文は外国の一流医学雑誌に掲載発表され、論文末尾の感謝の項に、

KAIBARA MORIKAZU MEDICAL SCIENCE PROMOTION FUNDATION の文字が記されており、財団よりの研究費の贈呈が医学の研究に役立っている証拠を見つけたようで喜んでおります。

その他の事業として、九州大学細菌学教室「青藍会」に、貝原守一賞を、同寄生虫学教室に、宮崎一郎奨励賞を贈呈し、それぞれ3回、2回となりました。

現在医学の研究は、癌、ウイルス感染症の治療を主目的に、免疫、遺伝子、分子生命学が主流をなし、これらの研究の成果が、直接医学の進歩、開発につながるのです。「医学の振興発展に寄与する」事が財団の設立目的であります。若い研究者の、この方面での研究のための一助になってくれればと願うのであります。

医学の振興を通し、少しでも社会に貢献する事が出来る貴い使命に誇りをもって、力を合わせ財団の運営に力を尽くしたいと思っております。

今後とも一層のご助力、ご指導をお願いして挨拶と致します。

第5回 研究助成金贈呈式について

専務理事 佐伯 仁子

本年度の研究助成金贈呈式は、平成8年11月30日（土）、昨年と同じく「KKRはかた」（福岡市中央区薬院）で行われました。

当日は雨模様の天気で、すでに晩秋を迎え肌寒さを感じる一日でした。11月2日の選考委員会で選ばれた6名の授賞者、財団より理事長を始め役員の方々、また来賓として選考委員をしていただいた森 良一先生（九大名誉教授）に出席して頂きました。

式は松崎 直氏（前財団事務員）の司会で、午後4時に開会されました。理事長は開会の挨拶で受賞者に喜びを述べられた後、「本年度も各大学より本財団の研究助成に多くの応募があり感謝いたしております。本日授賞の皆様は、財団選考委員会の公平厳正な選考を経て決定されました。応募された多くの優れた論文の中で、とくに優秀なものと認められたもので、まことにめでとうございます。財団よりの贈呈金が授賞対象の研究の進歩に役立って、立派な研究が完成されることを願っております。今年、九大薬学部の若い研究者、水島 徹助手がノーベル新人賞とも言える「若手科学者への科学賞」を日本人として初めて授賞されましたが、皆さんのうちからも、水島助手のような世界的に認められる立派な仕事になされることを希望します。」と、挨拶された後、受賞者一人一人に理事長より、賞状と助成金が授与されました。引きつづき選考委員を代表して、橋場邦武先生（長崎大学名誉教授）より、「みなさんの研究助成金の授賞をお慶び申し上げます。本年度は21編の論文の応募があり、貝原財団に対しての認識が定着してきたようで喜ばしいことです。応募論文はすべて立派な内容のものでしたが、選考委員で慎重審議し、皆さまの論文6編が決定されました。多くの立派な論文の中で特に優れた内容であります。今後なお一層の精進をなさって、立派な研究結果が実ことを期待します。」とのご挨拶がありました。

贈呈式後、出席者一同で記念写真を撮り、祝宴に入りました。

祝宴では、先ず結城操理事が「本日の式でのこの美しい純粋な雰囲気

に感動しています。汚れた世相の中で、まことに尊い事と思います。選ばれた若い6名の研究者の学問に対する情熱と純粹さに心を打たれるのです。皆さんの研究が立派に実を結び、医学の進歩に役立ち人々の幸せにつながるようになることを期待しています。皆さんの研究の立派な結実が、財団にとっては設立の趣旨を果たすことになり、存在の価値を高めてくれることにもなります。」と述べられ、また来賓としてご出席頂いた森 良一先生よりもお祝いのご挨拶をいただきました。最後に受賞者より、各自授賞論文の研究目的についての説明が5分づつされました。いずれも短時間に難しい研究内容を理解しやすく説明され、さすが選ばれた方々だとの印象を受けました。

和気あいあいのうちに祝賀会は行われ、午後6時に終了いたしました。が、本年度の授賞者のご挨拶で、授賞を心より喜び感謝の意を表され、それらの姿に接し、財団の仕事の仕甲斐を強く感じました。

本年度も無事に贈呈式を終えることが出来、財団の皆様始め研究助成に応募して頂いた方々に心より御礼を申し上げる次第です。

貝原財団平成8年度研究助成選考過程について

選考委員 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

平成8年度の貝原守一医学振興財団の研究助成に対しては、21件の応募があり、杉山浩太郎（九州大学名誉教授）、森 良一（九州大学名誉教授）、橋場邦武（長崎大学名誉教授）の3名の選考委員によって選考が行われた。また、佐伯清美理事長が同席された。

今回は、本財団の公募による研究助成の第5回目となるが、貝原守一医学振興財団の主要な目的である若い優秀な研究者に対する研究助成の事業が着実にその成果を挙げ、本年度にも将来性豊かな研究者の研究助成ができたことは、選考委員の一人としてもまことに喜ばしいことで、ご同慶の至りと思う次第である。

今回は、福岡県内の4校の医学部または医科大学の解剖学、生化学、法医学、免疫学、分子生命学、内科、外科、眼科、耳鼻科、皮膚科、麻酔科、臨床検査部など、多方面の教室から21件の応募があった。今回は大学以外の研究機関や医療機関からは応募がなかった。最近では基礎医学教室と臨床医学教室との研究分野や研究方法には共通する面も多くなっているが、今回の応募課題や研究方法にも分子生物学的、遺伝子学的、免疫学的手法などの用いられているものが多かった。

選考の第一段階としては、各選考委員がそれぞれに独自の判断により、応募者から提出された書類によって、応募者の研究歴、研究課題、研究目的、研究方法、これまでの研究実績、論文数及びその内容、論文掲載欧文雑誌の質の高さ、などを総合して、各応募研究の独創性、将来性、実現性などについて評価を行った。11月2日に選考委員会会場に各委員が各自の評価決定を持参し、評価を公表しあって、すべての応募課題について意見を交換し、約2時間の協議の結果、最終的に別紙に挙げられている6題の応募者を本年度の授賞者として決定した。

応募の内容は非常に優れたものが多かったので、十分な時間をかけて上記の各項目ごとに検討をしたが、選考委員が独自に行っていた評価は概ね一致し、最終的な決定を得るのに大きな困難はなかった。もちろん

種々の制約のために今回の授賞者は6名に限定せざるを得なかったので、選に入らなかった応募の中にも、授賞された方々と同等の立派な研究課題が少なくなかったことは付記しておきたいし、それらの研究者の今後のご研究の発展を期待する次第である。

最近の傾向として、特に先端的な研究では、分子生物学的、遺伝子学的、あるいは免疫学的研究方法を用いているものが多く、上述のように、今回の応募でもこのような研究課題が多かったが、選考に当たってはこのような点についての配慮は全く行っていない。このことは、今回の授賞課題を一覧してもご理解いただけることと思うし、次年度以降の選考についても同様であるので、今後も広い研究領域からの応募を期待したいと思う。

わが国の将来の経済的、政治的状況は難しいものと予想されており、また、驚異的な進歩を続けている医学研究の国際的状況の中にあつて、本邦の研究費などについても、従来のような均一的総花的方式の見直しも議論されている。研究者にとってもより難しい時代へ向かっていくようにも思われる。

このような時代の流れの中にあつて、貝原財団のように医学振興に寄与しようとする財団の役割と意義は、今後ますます大きくなるものと思われるが、本財団の事業の客観的評価は何と云っても、本財団の研究助成を授賞された研究者の方々が、立派な研究業績を挙げられること以外にはないであろう。選考委員としてこの点の責任を感じるとともに、今回の授賞者にもこれまでの授賞者と同様またはそれ以上のご活躍をお願いし、また、期待したいと思う。

また、選考委員として、今回の授賞者に次の事も是非お願いしたい。それは、今回の研究助成に関連する研究課題で論文を執筆、受理された場合には、論文の後記には本財団から助成を受けたことを明記して頂き、また、その別冊を財団宛にお送り頂きたいことである。これは本財団の今後の発展のための非常に大きな蓄積であり、また何よりの財産となるものである。今回の授賞に関連する原書論文を完成して頂き、このことの実行を是非ともお願いする次第である。

尚、今回の授賞をされた研究者の中に、謝辞とともに今後の抱負のお手紙を理事長に送られた方があったことを理事長が承り、選考委員の一人としても非常に嬉しく、また、感銘を受けた。他の授賞者の方々も同じようなお気持ちと推察し、研究の御発展をお祈りする。

以上、若干の感想や希望も含めて、選考経過の報告とさせて頂く次第である。



平成8年度 研究助成金贈呈者一覧表

申請者	所属機関及び推薦者	対象研究テーマ
市来 俊弘	九州大学医学部 循環器内科 教授 竹下 彰	AT2の組織特異的発現と血 圧調節機構
坂本 泰二	九州大学医学部 眼科学教室 教授 猪俣 猛	黄斑変性の治療開発
甲斐 久	久留米大学医学部 循環器病研究所 教授 今泉 勉	血管細胞増殖肥大における GPK-5の意義
樋田 一徳	九州大学医学部 解剖学第3講座 教授 小坂 俊夫	中枢神経系シナプス構成の 形態学的研究
君付 隆	九州大学医学部 耳鼻咽喉科学教室 教授 小宮山 荘太郎	MET電流を修飾する細胞内 環境変化
神田 芳郎	久留米大学医学部 法医学講座 教授 木村 博司	α (1,2) フコシルトラン スフェラーゼ遺伝子ファミ リーの分子進化

第5回 研究助成金受賞者の研究内容

アンジオテンシン 112型受容体の副腎髄質細胞における組織特異的発現調と血圧調節機構の分子生物学的解析

九州大学医学部循環器内科 市来俊弘

【目的】 アンジオテンシン112型受容体 (AT₂) は組織特異的にその発現が制御されているがそのメカニズム明らかではない。AT₂ の発現制御の分子機構を明らかにするためそのプロモーター領域を単離し、塩基配列を決定し、転写活性を検討した。

【方法】 SDラットのゲノムライブラリーをAT₂cDNAプローブでスクリーニングし、得られたクローンのプロモーター領域の約1200塩基対の塩基配列をdi deoxy法で決定した。deletion mutant作成し、ルシフェラーゼ遺伝子に結合した組み替えDNAをPC12Wに導入しルシフェラーゼ活性を測定した。DNA結合蛋白をゲルシフト法にて検討した。副腎AT₂の発現をノーザンブロット法にて検討した。【結果】 約1200塩基対のプロモーター領域にはNF- κ B、C/EB α 、AP-1、GRE、インスリン反応性配列などのコンセンサス配列が存在した。-1208/-749の領域には負の調節領域が、-749/-216の領域には正の調節領域があると考えられた。-44までのconstructでも全長の約半分の転写活性が認められた。-44/+58までの領域に結合する蛋白はPC12Wの核蛋白には3種類認められたが平滑筋細胞では1種類しか認められなかった。自然発症高血圧ラットや一酸化窒素合成阻害による高血圧ラットでは副腎AT₂の発現亢進が認められた。

【総括】 AT₂遺伝子のプロモーター領域の構造を明らかにした。近位プロモーター領域に結合する蛋白がAT₂を発現するPC12Wと発現しない平滑筋細胞の間で差があることからこの領域がAT₂の組織特異的発現に関与している可能性が示唆された。血圧の上昇しているラットにおいてAT₂は反応性に増加していると考えられた。今後コンセンサス配列の役割、血圧とAT₂の発現の関係を明らかにしていく予定である。

局所薬物送達法と遺伝子導入法を用いた新しい眼疾患の治療法の開発

九州大学医学部眼科学教室 坂本 泰二

眼組織への薬物や遺伝子の局所導入法により新しい治療法を開発する目的で本研究を行った。電気パルス照射により細胞に可逆性の小穴が一過性に形成されるので、その方法を用いた。培養家兎結膜線維芽細胞に電気パルス(1-2000 V/cm、50 msec、8パルス)を照射して、増殖に及ぼす影響を検討した。その際に、細胞増殖阻害薬(ブレオマイシン、マイトマイシンC、5-フルオロウラシル、0.001-50 μ M)を共に投与した際の変化とDNAラダーリングに与える影響を調べた。その結果、電気パルスのみでは細胞増殖を抑制しないが、細胞増殖阻害薬の効果を100倍以上亢進した。その際、アポトーシスが誘導されていた(Oshima Y, Sakamoto T et al, Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol, in press)。次に、この原理を実験的緑内障濾過手術に用いた。ブレオマイシンを浸したスポンジを家兎強膜上におき、同部位に電気パルスを当て、強膜弁を

形成した。その結果、術後30日に渡って低い眼圧が得られた。電気パルスにより低濃度の薬物を限局された部位に送達可能であり、濾過手術の効果を高めることができた(Sakamoto T et al, Invest Ophthalmol Vis Sci submitted)。

最後に、この方法を遺伝子導入に用いた。Lac Z 遺伝子を持つプラスミドをラット前房内に注入して、角膜側から電気パルスを与えた(40 V、50 msec、8パルス)。導入遺伝子の発現をX-gal 染色で確認し遺伝子導入効率を測定した。その結果、遺伝子は21日目間にわたって角膜内皮に導入された。導入効率は3日目には50%であったが、経時的に減少した。他組織に障害はなかった。(Oshima Y, Sakamoto T et al, Gene Ther, submitted)。今回、目的組織に限局した薬物や遺伝子の導入が可能であることを示したが、このことは、眼疾患治療に新しい道を開くものといえる。

GRK-5 遺伝子導入による心血管細胞増殖・肥大に対する効果の検討とPTCA後再狭窄に対する遺伝子治療の基礎的研究

久留米大学医学部循環器病研究所 甲斐久

(1) 培養ラット血管平滑筋細胞におけるホスホリパーゼ活性測定法の確立：培養細胞でのホスホリパーゼC (PLC) 活性・ホスホリパーゼD (PLD) 活性をAlexanderらの方法を用いて測定する系を確立した。

(2) HVJ-リボゾーム-G蛋白質共役型受容体キナーゼ5 (GRK5) cDNA組み換えベクターの作成：Lefkowitzらより譲与されたGRK5 全長cDNAをpRKSのEcoRI-xbaIサイトに組み込んだベクターを構築した。サイトメガロウイルスエンハンサー・ β -アクチンプロモーターが組み込まれた発現ベクターpUCにGRK5 cDNAを組み込んだ。不活化されたセンダイウイルス (HVJ) と脂質からなるリボゾームにGRK5組み換えpUCを取り込ませHVJ-リボゾーム-cDNA組み換えベクターを作

成した。コントロールとして β -ガラクトシダーゼ組み換えベクターを作成した。

(3) HVJ-リボゾーム法によるin vitro 遺伝子導入： β -ガラクトシダーゼ組み換えベクターを含むHVJ-リボゾームを培地に加え培養平滑筋細胞への遺伝子導入を試みた。現在導入効率の改善を検討中である。今後、GRK5組み換えHVJ-リボゾームを用いてGRK5過剰発現細胞を作成し、①細胞増殖・肥大に対する影響②アンジオテンシンII刺激に対するPLC・PLD活性の変化を観察しGRK5の生理学的意義の検討し、③冠動脈形成術後再狭窄モデルであるラット頸動脈バルーン損傷後内膜肥厚をGRK遺伝子導入が予防しうるかについて遺伝子治療の基礎的実験を行う予定である。

中枢神経系シナプス構成の形態学的研究：電子顕微鏡連続切片再構築法による嗅球ニューロン・シナプス構成 (Synaptic Organization) の免疫細胞化学的研究

九州大学医学部解剖学第三講座 樋田 一 徳

嗅覚の一次中枢嗅球は、比較的少数のニューロン種の単純な層構造に多種多様な化学的物質が存在し、嗅覚情報処理関連の局所回路が示唆されてきた。我々は嗅球を中枢神経系シナプス構成の魅力的な研究対象と考え形態学的解析を進めてきた。

これまでの解析で我々は、嗅球・糸球体近傍の介在ニューロン群は、Calbindin、Calretinin、及びGABAを各々含有する少なくとも3つの独立した化学的 Subpopulation が存在し、また共焦点レーザー光顕による観察から、嗅受容細胞終末とこれら介在ニューロン群樹状突起との三次元的近接度合いに、かなりの多様性があることを最近明らかにした。このニューロン群は、高次中枢への投射ニューロンと嗅受容細胞の間に介在し、投射ニューロンと相反性シナプスを形成するGABAニューロンであると従来信じられてきたが、我々の所見は、これらニューロン群が含有化学物質のみならずシナプス結合につ

いても従来の定説ほど単純でないことを示唆している。これは、ゴルジ法、色素注入法、電顕、免疫細胞化学といった従来の形態学的研究方法が独立した解析に留まった為であり、これらの統合的解析を行わない限り嗅球シナプス構成の諸定説は全く不確実と考えざるを得ない。これは同時に、ニューロン種の同定と電顕レベルでのシナプス結合を中心とした従来の解析結果を根本的に見直す必要性を端的に示している。

本研究は、免疫細胞化学法を用いて、光顕レベルでの最高解像度で三次元的構造解析が可能な共焦点レーザー光顕で化学的性質を明らかにした嗅球ニューロンを、電顕連続切片再構築法によるシナプス結合の定量解析を行なうことにより、共焦点レーザー光顕像と再構築電顕像、更に化学的性質と形態的特徴を明確に対応させ、嗅球ニューロン・三次元的シナプス構成の全体像解明の為に確かな形態学的基礎を築くことを目的としたものである。

MET電流を修飾する細胞内環境変化

九州大学医学部耳鼻咽喉科 君付 隆

音を認知するためには、空気の機械的振動刺激を神経の電気現象に変換する機能が必要である。生体内でこの役割を担っているのは内耳の蝸牛であり、その中でも有毛細胞において感覚毛への振動刺激が細胞膜の電流に変換される。細胞内でその変換の役目を担っているのが、有毛細胞感覚毛に存在するイオンチャンネルであり、機械電気変換チャンネル (mechano-electric transduction channel, METチャンネル) といわれている。感覚毛の変位角度に依存してこのチャンネルが開閉し、細胞内の電位を調節している。この時イオンチャンネルを流れる電流がMET電流である。

近年のバッチクランプ法の普及と細胞の単離技術の進歩により、細胞の膜イオン電流の研究は急速に発展した。しかし、蝸牛有毛細胞においては、特にMET電流においては、細胞内で最初に発生する重要な電流であるにもかかわらず、実験手技上の困難さのためそ

の研究は始まったばかりである。その電流を修飾する因子については、薬理学的特性を含めて未だ殆ど研究されていない状況である。

MET電流を修飾する因子として、細胞外から作用する場合と、細胞内から影響を与える場合があるが、本研究では細胞内の環境を、細胞内灌流法あるいはCaged物質による細胞内薬剤濃度上昇法により変化させ、MET電流の変動を測定する。どのような細胞内条件により、MET電流が増強あるいは抑制されるか、そのメカニズムを見出すことを大きな研究目的としたい。

難聴の中で、感音難聴は治療不可能とされてきた。しかし感音難聴でも内耳のみに障害があり聴神経は残存している場合もあり、近年の人工内耳の出現により音を取り戻した症例もみられるようになった。本研究が、感音難聴、特に内耳性難聴の解明あるいは治療に少しでも貢献できることを期待している。

$\alpha(1, 2)$ フコシルトランスフェラーゼ遺伝子ファミリーの分子進化

久留米大学医学部法医学 神田 芳郎

ABO血液型物質は糖鎖抗原であり、赤血球膜表面のみならず消化管粘膜や分泌液中に広く分布している。組織におけるABO抗原の発現はその前駆体であるH抗原を合成する $\alpha(1, 2)$ フコシルトランスフェラーゼにより調節されており、人では主として赤血球でのH抗原を合成しているH型と消化管粘膜や分泌液中のH抗原を合成しているSe型という2種類の酵素が存在する事が知られている。これら2種類 $\alpha(1, 2)$ フコシルトランスフェラーゼに加えて、これらの糖転移酵素遺伝子と約70%のホモロジーをもつ遺伝子が存在する。しかしながらこの遺伝子はフレームシフト変異とナンセンス変異によって不活化された偽遺伝子であることが報告されている。ところが我々が調べたAfrica Green Monkey(旧世界ザル)ではこの偽遺伝子のHomologueは人の遺伝子と約95%のホモロジーを示したにも関わらずナンセンス変異、フレームシフト変異共に存在せず活性のある酵素をコードしていることが示された。そこ

で我々はこの偽遺伝子を指標にして手長ザル、オラウータン、ゴリラ、チンパンジーといった類人猿の遺伝子を比較することによりどの時期にこの遺伝子が偽遺伝子になったのかを調べた。

その結果 (1)ナンセンス変異はオラウータンの祖先が人やゴリラ、チンパンジーの祖先と分かれた段階で生じたこと、(2)フレームシフト変異はゴリラ並びにチンパンジーの祖先と人の祖先が分岐した後で生じたことが示唆された。さらにゴリラには人とは違ったフレームシフト変異が存在することが示された。

更にSe型の $\alpha(1, 2)$ フコシルトランスフェラーゼ遺伝子は人種(CaucasianとOriental)の間に明らかな多型の違いが存在しているので、現在、中国人(東北部)とアフリカ人(南アフリカ)の遺伝子について解析中である。これらの研究により人種がどのように分岐していったのかということが解明できるものと期待している。

青藍会（九州大学医学部細菌学教室同門会）貝原守一賞については
下記のごとく決定いたしました。

九州大学名誉教授 天児 和暢

平成 8 年度 青藍会貝原守一賞

受賞者

梅田 明子 博士

九州大学医学部細菌学講座講師

受賞論文

「ブドウ球菌細胞の研究」

発表誌： J. Elect. Microscopy. 41:46-52, 1992

[Location of peptidoglycan and teichoic acid on the cell wall
surface of *Staphylococcus aureus* as determined by immunoelectron
microscopy.]

第 8 回 国際ブドウ球菌シンポジウム (Aix les Bains, France) 1996

[Purification and characterization of the protein associated with
the capsule of *Staphylococcus aureus*.]

宮崎一郎奨励賞（九州大学医学部寄生虫学教室に設置）については
下記のごとく決定いたしました。

九州大学医学部寄生虫学講座

教授 多田 功

平成8年度 宮崎一郎奨励賞（第2回）

受賞者

高岡 広行 博士

大分医科大学助教授・九州大学非常勤講師

題 目

「獣類寄生オンコセルカのヒト寄生」

財団の主な事業報告（平成8年4月～平成9年3月）

月 日（曜日）	行 事
H.8年 4月26日（金）	国道拡幅工事の為、財団事務所移転。 移転申請を行う（福岡県医療指導課）。
5月22日（水）	九州大学医学部細菌学教室訪問 「青藍会」貝原守一賞を贈呈。
6月20日（木）	県医療指導課に対する平成7年度事業報告 書作成。
7月 6日（土）	平成8年度第1回理事会開催。（KKRはかた）
7月 9日（火）	九州大学医学部寄生虫学教室に宮崎一郎賞 を贈呈。
7月11日（木）	平成8年度研究助成論文の公募案内発送。 公募期間：平成8年7月～9月末日
8月28日（水）	財団事務所移転許可下りる。
9月30日（月）	平成8年度研究助成論文公募締切る。 応募者数21名
10月20日（日）	評議員会開催、議題、財団理事ならびに 監事の任期満了に伴う改選の件。
11月 2日（土）	研究助成論文選考委員会開催。 （福岡セントラルホテル）
11月 6日（水）	研究助成対象論文決定、授賞6名、 決定通知、助成金授与式の案内状発送。
11月30日（土）	貝原守一医学振興財団 第5回研究助成金授与式開催。（KKRはかた）



昭和17年（1942）31歳

貝原守一の遺稿より（その5）

昭和17年（九大新聞）

北京 原 人

㊦ 貝 原 守 一

北京協和医学校にあった北京原人の頭蓋が粉失していることが発見されたのは、ちょうど私の天津滞在中のことで、内地の新聞にも報道されたやうであるが、華北ではことに反響が大きく、はるばる東京から調査に見えた長谷部教授等の落胆も大きかったと思はれた。

北京原人（シナントロプス・ベキネンシス）は北京人類ともいわれ、支那では中国猿人ともいわれているが、一九二七年以来北京の協和医学校を中心として、ブラック教授等により北京の西南郊周口店に於て組織的にその遺骸の発掘が行はれてきた。一九三六年ブラックの死後は後任のワイデンライヒ教授によって発掘は継続され、日支事変前までに三十六体分の遺骸がえられ、その中には少数ながら完全な頭蓋や、下腿骨、上腿骨、橈骨などもあった。北京原人はその頭蓋骨の形から洪積期前に属する世界最古の人類と考えられ、又その下顎骨や上門歯に認められる一、二の特長から東洋人の特長をもつ原人であり、更に頭形の研究から北京原人がすでに言語の能力を持ち、右利きであったことも推定されていることは周知のことである。ワイデンライヒは北京原人は東洋人種の祖型であり、東洋は原始人の時からすでに東洋人のものであったと述べている。

（筆者は九大医学部助教、医学博士）

北京 原 人

㊦ 貝 原 守 一

北京原人の頭蓋は天津の北疆博物館にもある。私は昨年この博物館を訪うてはからずも実物に接した喜びを忘れかねて、今年も再度訪れた。北疆博物院の北京原人頭蓋は完全なものではない。一九三六年と三七年にワイデンライヒによって発掘されたもので、ブラックの手になる模型の頭蓋をばさんで男女各二個づつ左右にならべてある。残念なことに顎骨はないが、その特長である頭蓋高の低いことや眉上弓が前頭部よりも非常に突出している点等ははっきり認められる。尚之と一緒に北京原人の遺物である打缺れた礫石や石英片などの粗石器や焼いたあとのある動物骨の化石なども陳列してある。

完全な北京原人の頭蓋などが粉失してしまつたとすれば惜しいことだが、今後日本人の手で組織的な発掘が行はれさえすれば、更に完全な遺骸の発見も可能なことであるし、研究がより完全の域に進められることは疑ひないと思ふ。この純粋に学問的と考えられ勝ちな研究も、ジャワ猿人やソロー人等の研究とともに大東亞共栄圏における重大な研究題目であることが広く認識されるべきだ。

（筆者は九大医学部助教、医学博士）